

# 特別支援学校におけるスケジュール表を用いた 指導の現状と課題

丹羽 克文\*・郷右近 歩\*\*

Using schedule boards for children with intellectual disability: A review

Katsufumi NIWA and Ayumu GOUKON

## 要 旨

近年、特別支援学校においては、スケジュール表を用いた指導が多く行われている。本稿では、国内の教育現場において導入が進められた背景について検討を行った。先行研究を分類した結果、スケジュール表を用いる目的には「子どもの安心・安定を目的として用いる場合」と「自発的な行動を促すために用いる場合」があること、そして、スケジュール表の形式には「活動の手順を示すもの」と「生活の時間の流れを示すもの」があることが明らかとなった。従来、スケジュール表を用いた指導の有用性や効果は多く報告されてきたものの、いくつかの課題も浮かび上がってきた。すなわち、事前にスケジュールを伝えることでかえって不安になる場合や、順序や時間という概念を一樣ではない形式で表現している場合である。今後は、上記の課題を解消するために、教育実践を通したさらなる検討が必要であることが示唆された。

## I. はじめに

近年、特別支援学校の各教室には、大抵、目立つ位置にスケジュール表がある。教材教具としても、持ち運びが可能なスケジュール表が各教室に複数用意されている。筆者が勤務する特別支援学校においても、このような風景が日常となつて久しい。しかしながら、筆者が教員として勤務し始めた頃、スケジュール表を用いた指導はここまで普及していなかったように思われる。

特別支援学校においてスケジュール表を指導に用いることの利点としては、以下のような理由が考えられる。第一に、スケジュールを予め理解しておくことで、児童生徒が見通しを持ち安心して活動に取り組むことができるという点である。第二に、スケジュールの変更や、新しい活動といった、児童生徒が苦手さを示しやすい状況を回避できるという点である。第三に、画像やイラストなど、視覚的な情報を手がかりとすることで、音声言語のみの働きかけよりも確実な理解を促すことができるという点である。

特別支援学校におけるスケジュール表は、文字に加えて、画像やイラストなど、視覚的な手掛かりが付与されていることが多い。それらは、例えば、マグネットタイプのシートになっており、黒板やホワイトボードへ貼り付けられるように作成されている。児童生徒の発達段階に応じて、画像やイラストは具体物から象徴概念へと発展したり、ひらがなの文字が漢字かな混じりへと表記も発展する。教員が予めセッティングしておくこともあるが、適切なマグネットシートの選択や配置が学習の一環となっていることもある。

このような教育活動が日常となつており、その有用性については特に疑問を抱くことはなかった。教

---

\* 三重大学教育学部附属特別支援学校

\*\* 三重大学教育学部

育実習生に対しても、スケジュール表を用いた指導を垂範してきた。ところが、大学院教育学研究科において、これまでの教育活動を振り返る中で、スケジュール表が必ずしも児童生徒のためにはなっていない場面が散見された。注意深く観察を続けると、教員が意図的にスケジュール表を児童生徒に見せないように工夫している場面も確認された。

スケジュール表を用いた指導がこれほどまでに教育現場に普及した背景について、教員生活を振り返ってみても、確たる根拠（先行研究の知見）には思い至らなかった。そこで、本研究では、スケジュール表を用いた指導が普及した背景について検討し、スケジュール表を用いることの限界や課題についても明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ. 教育現場に普及した背景

スケジュール表を用いた教育的実践について、国内における先行研究を CiNii で検索した結果、その多くが 2000 年代のものであった。そして、複数の研究において TEACCH という文言が見受けられた。服巻・野口・小林（2000）、志村・矢口・中村・鳴海・渡邊・木村（2000）、廣島・広瀬・古川（2002）、荻原（2003）、木村・木村・古川（2003）、服巻・野口（2005）、小林（2006）、佐々木（2007）、小林・小林・佐々木（2010）、真鍋・岩藤・小田桐・青木・松本（2013）、平田・海原・三宅・櫻井・光畑・天野・香西（2014）などが、本文中で TEACCH に触れている。

また、これらの先行研究の対象は全て自閉症（DSM-5 では Autism Spectrum Disorder）であり、TEACCH には言及していない先行研究（霜田，2006；松下・園山，2008；中塚・落合，2008；村本・園山，2011；松下・園山，2013；森・古藤・藤原・永井，2015）も、対象は同様に自閉症であった。

以上のことから、スケジュール表を用いた指導の対象としては、主として自閉症児が想定されており、TEACCH が国内に紹介されたことが契機となっていた可能性が示唆された。なお、TEACCH については Mesibov, Shea, and Schopler（2004）などに詳しい。

## Ⅲ. 先行研究の分類

スケジュール表を用いる目的としては、「子どもの安心・安定を目的として用いる場合」と「自発的な行動を促すために用いる場合」に大別された。また、スケジュール表の形式としては、「活動の手順を示すもの」と「生活の時間の流れを示すもの」に大別された。

前項で紹介した先行研究を目的と形式ごとに分類した結果を Table 1 に示した。表の第 1 欄は「子どもの安心・安定を目的として用いる場合」×「活動の手順を示すもの」、第 2 欄は「子どもの安心・安定を目的として用いる場合」×「生活の時間の流れを示すもの」、第 3 欄は「自発的な行動を促すために用いる場合」×「活動の手順を示すもの」、第 4 欄は「自発的な行動を促すために用いる場合」×「生活の時間の流れを示すもの」である。それぞれの要素を兼ね備えている場合もあり、分類はあくまでも便宜的なものである。

大まかな傾向として、スケジュール表を用いる理由としては、「子どもの安心・安定を目的として用いる場合」が多いことが示された。スケジュール表の形式による研究の偏りは見られなかった。教育現場においても、「活動の手順を示す」スケジュール表（例えば、手持ちのホワイトボードなど）と、「生活の時間の流れを示す」スケジュール表（例えば、黒板を用いたその日の予定表など）を併用していることから、いずれの研究も重要であることが示唆された。

Table 1 スケジュール表を用いる目的と形式による先行研究の分類

	活動の手順を示すもの	生活の時間の流れを示すもの
子どもの安心・安定を目的	第1欄： 廣島ら（2002） 村本・園山（2011） 松下・園山（2013） 平田ら（2014） 森ら（2015）	第2欄： 服巻ら（2000） 廣島ら（2002） 荻原（2003） 中塚・落合（2008） 小林ら（2010）
	第3欄： 霜田（2006） 松下・園山（2008） 松下・園山（2013）	第4欄： 志村ら（2000） 真鍋ら（2013）
	自発的な行動を促すため	

#### IV. 今後の課題

スケジュール表を用いた指導が重要でありかつ有用であることが従来の知見により明らかとなった。ただし、若干ではあるものの、先行研究において課題も指摘されていた。

第一に、スケジュール表を「子どもの安心・安定を目的として」用いていたにもかかわらず、必ずしもそのような効果が得られなかった例に関する言及があった。例えば、森ら（2015）は、カードによる見通しの提示により「注射の手順を理解できたが余計に怖がった」ケースが複数いたことを報告している。

第二に、スケジュール表を「自発的な行動を促すために」用いているのだが、周囲の支援者が適切な働きかけをしなければ自発的な行動には至らない可能性に関する言及があった。松下・園山（2008, 2013）は、適時のプロンプトが必要となる段階があることを指摘している。

また、多くの先行研究を通覧する中で、多様なスケジュール表の形式があることが明らかとなった。例えば、時系列を縦軸にとる場合もあれば、横軸にとる場合もあり、カードタイプの場合、並びが一行ではなく数字の番号以外に手がかりのない場合や、出したり隠したりする手順に意味が含み込まれている場合など、順序や時間という概念が一様ではない形で表現されている現状が浮かび上がってきた。

現在、筆者が勤務する特別支援学校において、スケジュール表を用いた指導の実際について観察記録を行っているが、やはり上記の複数の課題に対応するエピソードが確認されている。児童生徒の安心・安定や、自発的な行動を促す上で、どのような支援や工夫が必要か、今後も教育実践を通して検討を続けたい。

#### 文献

- 荻原はるみ（2003）高機能自閉症児の幼稚園における援助と適応．名古屋柳城短期大学研究紀要，25，129-140.  
 木村隆・木村尚美・古川宇一（2003）我が家の構造化の試みとその問題点，情緒障害教育研究紀要，22，25-29.  
 小林一恵（2006）自閉症療育の場から．コミュニケーション障害学，23（1），52-56.  
 小林幸代・小林信篤・佐々木正美（2010）自閉症児への支援技法である構造化における評価の重要性．川崎医療福祉学会誌，19（2），277-283.  
 佐々木正美（2007）自閉症療育．脳と発達，39，99-103.

- 志村克美・矢口明・中村誠司・鳴海友紀恵・渡邊倫・木村健一郎（2000）養護学校（知的障害）における自閉症児指導法に関する実践的研究（1）. 情緒障害児教育研究紀要, 19, 93-99.
- 霜田浩信（2006）自閉症児に対する学習課題遂行のためのセルフ・マネージメント行動の指導. 文教大学教育学部紀要, 40, 67-74.
- 中塚雅子・落合利佳（2008）発達障害児と共に学ぶ. 京都文教短期大学研究紀要, 47, 40-49.
- 服巻繁・野口幸弘・小林重雄（2000）こだわり活動を利用した一自閉症青年の行動障害の改善. 特殊教育学研究, 37 (5), 35-43.
- 服巻繁・野口幸弘（2005）自閉症青年の衝動的行動の改善における先行刺激操作と結果操作による介入の検討. 特殊教育学研究, 43 (2), 131-138.
- 平田涼子・海原康孝・三宅奈美・櫻井薫・光畑智恵子・天野秀昭・香西克之（2014）歯科診療時における自閉症スペクトラム児の個々の特性に合わせた対応. 小児歯科学雑誌, 52 (1), 90-96.
- 廣島君恵・広瀬郁子・古川宇一（2002）北の峯学園における TEACCH プログラム導入の取り組み. 情緒障害教育研究紀要, 21, 121-128.
- 松下浩之・園山繁樹（2008）自閉性障害児の余暇活動における活動スケジュール利用の効果に関する事例的検討. 特殊教育学研究, 46 (4), 253-263.
- 松下浩之・園山繁樹（2013）新規刺激の提示や活動の切り替えに困難を示す自閉性障害児における活動スケジュールを用いた支援. 特殊教育学研究, 51 (3), 279-289.
- 真鍋克己・岩藤百香・小田桐早苗・青木陸祐・松本正富（2013）ビジュアルデザインによる自閉症児向けスケジュールの改善提案. 川崎医療福祉学会誌, 22 (2), 252-257.
- 村本浄司・園山繁樹（2011）常同行動を示す自閉症者に対する活動スケジュールを使用した余暇支援. 障害科学研究, 35, 147-159.
- 森瞳子・古藤雄大・藤原彩子・永井利三郎（2015）自閉症スペクトラムの子どものための予防接種絵カードの有用性に関する検討（第1報）. 小児保健研究, 74 (2), 240-246.
- Mesibov, G. B., Shea, V. & Schopler, E. (2004) The TEACCH approach to autism spectrum disorders. 服巻智子・服巻繁訳（2007）TEACCH とは何か 自閉症スペクトラム障害の人へのトータル・アプローチ. エンパワメント研究所.